

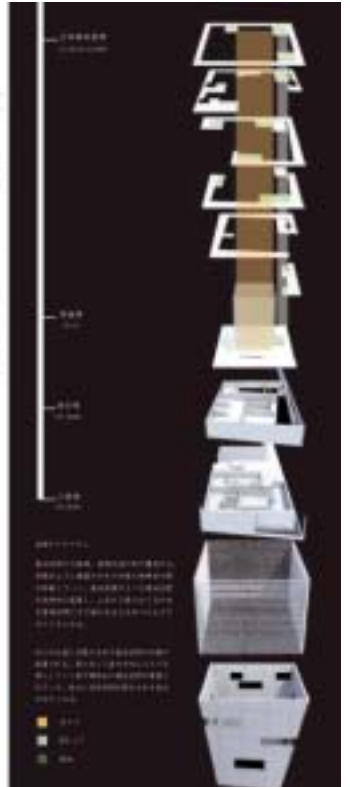
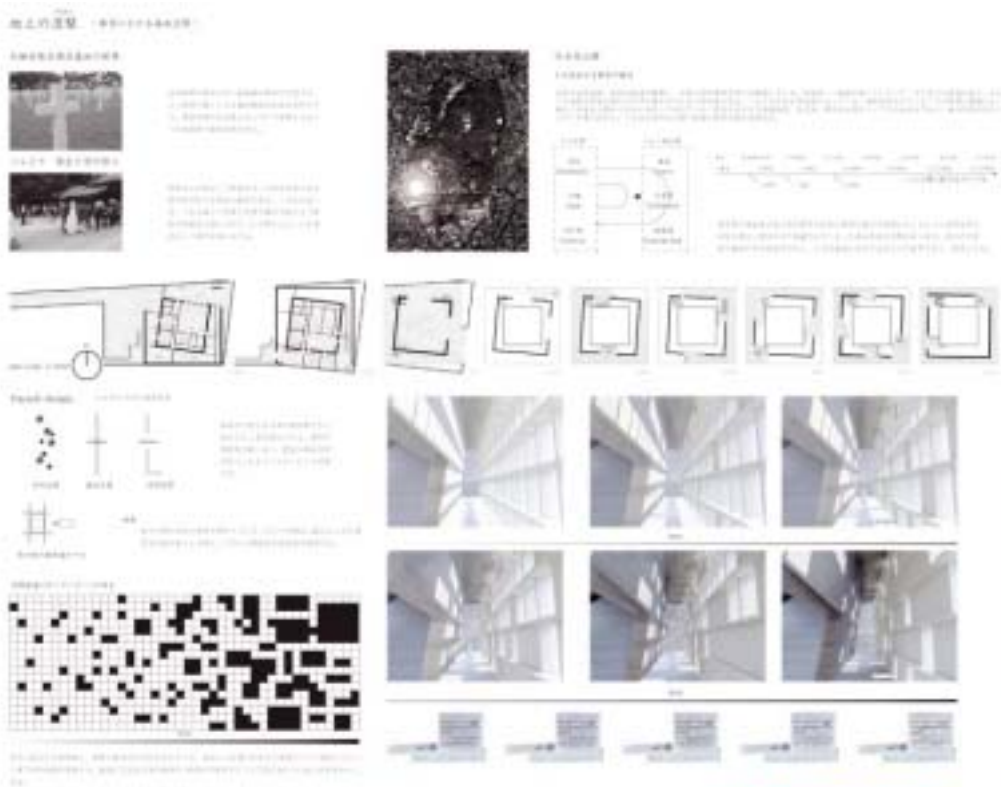


地上の涅槃 都市における墓地空間の提案



津村 祐輔 (つむら ゆうすけ)
千葉大学 工学部 デザイン工学科建築系

JIA全国出品作品



日本は少子化に歯止めがかからないまま人口減少社会に突入した。数年後には800万人ともいわれる団塊世代が最前線の社会的生産活動現場から引退し、彼らは高齢者に仲間入りし、あっという間に3人に1人が高齢者という時代が訪れる。言い換えれば、年間170万人が死亡する大量死時代の到来である。

日本における墓地は、近年の個人化に伴う社会現象の影響と土地の狭小化によって用地確保が困難となり、精神性より効率を優先した様々な形態の墓地が生み出されている。生と死を結びつける存在として、本設計では葬祭行為を再びハレの場として捉え直す。その死という厳肅なる事実を契機として、習慣に堕ちてしまった生が大きく揺り動かす機会であり、都市全体にハレを浸透させる装置を提案する。



講評

都心の憩いの場代々木公園に建てられた、墓地建築である。今日我々が「死」を生活から見えない領域に追いやっていることに問題意識をもち、あえて忌み嫌われる火葬場・葬祭場・墓地を、日常生活の芯に据え置くことによって、逆に「生きる」ということを考えていく機会を与えることができると捉えた、人間の本性を考えるきっかけを与えていく「媒介建築」の提案である。建築を被うコンクリート打ちっ放し板状格子は納骨スペースであると共に、「生」と「死」の空間を緩やかに仕切る象徴的な壁となる。納骨される人々の増加と共に変化していく壁は、時間の蓄積を視覚化すると共に、回廊に豊かで変化に富んだ陰影をつくりだし、静謐な空気感を生み出すことに成功している。ドローイング模型共に非常に完成度が高く、優秀賞という高い評価を勝ち得た。

(審査委員：関谷 和則)